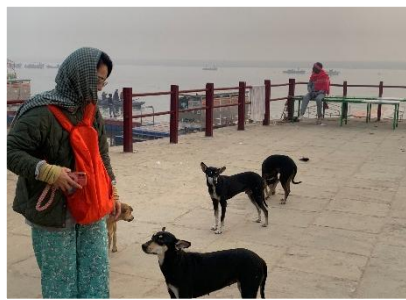




インド珍道中の旅（一灯苑の法話会より 第三話）

昨年、12月16日から26日迄、インドの「ブッダガヤ」へ向けての旅のお話をします。

お釈迦様への「恩返しの旅」が教えてくれたのは「急激な国の発展は大気汚染」「格差社会」の原因である「カースト制度」の現実でした。ガイドさんから飲料水は「現地の水は飲まないように」と注意を受けて旅が始まりました。ペットボトルを買い、飲んでいいたが、二日目から「下痢」が始まりました。ガイドさんのアドバイスは「絶食して、塩水を飲んで回復するまで寝て待つしかない」とのこと。極めて「原始的な療法」でした。なんとガイドさんからは「この下痢が始まりました。妻は日本にいる時から薬を飲まず、病院へも行かず、絶食と睡眠で病気を治していました。しかし、旅で疲れた体だったのは妻だったのが証明された形でしました。しかし、旅で疲れた体だったのは妻もあり、妻は「二日間」寝込みました。私は「無理強い」して連れ来てきた事を後悔しました。二日目に、やせ衰えて起きてきた妻が最初に食べたい食物は「バナナ」でした。さっそく「バナナ」を買いに走り食べました。夕日に照らされたガンジス河を見ながらバナナを手にして食べようとした時、目の前に「サル」が品よく座っているではありませんか。サルもヒンズー教では神様です。回復した妻は食べようとした「バナナ」をそっと差し出しました。バナナを手に入れたサルの逃げ足は速かった。気を取り直してバナナを食べようとしたら、またサルが品よく座っている。今度は、可愛い子ザル去っていききました。インドでは「富める人は、貧しい人に施すことは当たり前である」という。動物と人間の間も、そうなんだろう。動物と人間が共存するインドを体験できた旅の一コマであった。夕日がガンジス河をオレンジ色に染めた。「生きて良かったね」と聖なる河「ガンジス」が語りかけてきた。ガンジス河を見ると上流で「火葬」が行われていた。「生と死」を見つめ直す事こそ「仏陀」が私たちをインドにいざなわれた理由であったのだ。「私たち珍道中の旅・・・お楽しみに・・・次号に続く」



サルも犬も牛も仲良く暮らします

サルとバナナ

一灯苑 きらきら 通信

母 の 日



坂本町唯一の高齢者施設 坂本の里 一灯苑

入居者募集中！！

見学申し込み・お問い合わせは、
下記の担当者まで御連絡下さい。

特別養護老人ホーム 坂本の里 一灯苑

定員50（入居者数46）**残り3室**

〒869-6105

八代市坂本町坂本1071

☎0965-53-7277（担当者：小川・村本）

高齢者の生活支援・介護福祉の相談窓口

あんしん相談センター 一灯苑

を気軽に利用ください！！

〒869-6105

八代市坂本町坂本1071

☎0965-45-2320（担当者：上村）

※R7年5月21日現在